

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第879号 平成27年2月12日

議論する高校生

最近の高校生については、とかく「何を考えているのか分からない」とか「はっきりモノをいわない」といったようなネガティブな評価が付きものですが、「北の高校生会議」のニュースを見て、「なかなかやるじゃないか！」という感想を持ちました。というより、見直したといった方が良いかも知れません。

「北の高校生会議」というのは、道内の高校生が自ら、社会的課題についてじっくり語り合おうという意図のもとで、今年の1月6日から2泊3日の日程で「国立大雪青少年交流の家」を会場に開催されたものです。

企画運営の中心メンバーは、札幌国際情報高校2年の秋山真路さんと旭川東高校2年の田中俊介さんのお二人ですが、彼らに共通しているのは、高校生の仲間と本気で語り合いたいという事です。

今の高校生達は、社会の様々な問題について無関心のようにも見えますが、実はそうではなくて、それぞれに自分なりの思いを持ってしっかりと考えている高校生が少なくない事を、今回の「北の高校生会議」は教えてくれたように感じます。

今回の会議には、札幌、旭川、函館、帯広等から34人が参加しています。34人という参加者数が多いか少ないか、評価は分かれるかも知れませんが、私は、参加者数がどうかよりも、高校生の手によって、高校生主体の話し合いの場が実現した事を高く評価したいと思っています。

会議のテーマは、「原発」「教育」「貧困」「地域活性」「防災」「安全保障」と多岐にわたっており、まず、生徒や専門家が問題提起の発表をした後、全員で自由に感想や意見を述べあったようです。なお、「教育」分野では、英語教育をテーマに、ディスカッションやプレゼンは全て英語で行う計画としていたようです。私の場合は、英語でのディスカッションと聞いただけで敬遠してしまいましたが、本番の会議ではどうだったのでしょうか。

2泊3日にわたる討論漬けの時間は、参加した高校生達にとっては恐らく刺激的な時間だったに違いありません。

今回の「北の高校生会議」の取り組みを見てみると、世の中の動きに関心を持ち、本音で話し合える場を求めている高校生が少なくない事を強く感じます。今後、高校生が主体となって、本音で語り合える場がもっと広がる事を期待したいものです。

また、上述の田中さんは、高校生に対して「よりよい世界を創りあげるために我々が行動できることは何でしょうか？」「今、そしてこれから、社会の傍観者ではなく、

社会の一員として何をすべきでしょうか？」と問いかけると共に、「その答えを一人ひとりがこの会議を通じて発見して欲しい」と述べています。

「傍観者としてではなく社会の一員としてなすべき事は何か」という問は、高校生のみならず全ての国民（道民）が共有すべきものではないでしょうか。田中さんの投げて来た直球に対して、我々大人達の方もたじろがずしっかりと受け止め、そして、相手の胸元に向かってストライクボールを投げ返して行く必要があると、改めて感じたところです。（塾頭：吉田 洋一）